

牧野先生の思い出

学校法人電子学園
専門職大学準備室

職員

石 山 眞 帆

「牧野先生、この度は定年退職、おめでとうございます。

思い返すと、初めて先生の講義を受けたのは、二年生の「中世近世文学史」でした。先生はほとんど板書されなかったと記憶しています。そのため、講義中先生のお話を伺いながら、要点をまとめてメモしていく必要があります。当時、まだ要点をまとめたり、話を聞きながらメモしたりすることに慣れていなかった私は悪戦苦闘しましたが、同時に自身のスキルアップになりました。一、二、三回の講義の中から小テストが行われ、毎回の講義で配布されるプリントの中から出題されましたが、いつも想定していなかった部分から出題されたり、テスト予定の日にテストが行われなかったり、予告されていない日にテストが行われたりと、ゼミに配属される前から牧野先生に翻弄されていました。

三年生の「中世近世文学研究」ではいつも予想できない先生の授業にも慣れてきて、「さすが牧野先生だ」と常々感じていました。

私の代の牧野ゼミは、例年少人数精鋭である牧野ゼミでは珍しく、12名と大所帯でした。ゼミでは、先生からは参考にした方が良い文献を教えていただいたり、私達の発想に対して「そのアイデア面白いね」というお言葉をいただいたりすることはありましたが、内容について指摘いただいたり、ご指導いただくことはとても少なかったです。自分で課題を見つけ、自ら考え、その解決策を見つける。このことこそが牧野先生のご指導なのだと思います。

卒業論文提出後の試験では、一対一での口述試験と伺っていましたが、当日教室にいくと、A4のフリーペーパー

が配布され、そこに卒業論文の要約を書くよう指示されました。当時の皆の驚いた顔は今でもよく覚えています。ゼミに配属される前から、先生は予想を超えた形で私達学生を試してくると思っていた私は、急遽口述試験が記述試験に変わったとき、やはり牧野先生は牧野先生だと思いました。どんな質問にも答えられるよう、何章で何を書いたかなど、事前にしっかりと読み返しておいてよかったです。このことを覚えておいてください。

卒業後、国文学科の助手になってからは、先生が新幹線の行き帰りで論文を書き上げられたこと、実践に在職されてからほとんど途切れることなく毎号実践国文学で執筆されていたことなど、先生の武勇伝をたくさん伺いました。恥ずかしながら在学中、研究者としての先生をあまり存じ上げませんでしたので、新しいことを探求し続けている先生の姿に尊敬の念を抱きました。

助手としての仕事では、業務を行う中で不便と感じた部分について、自分で考え、解決策を練り、改善していく、ということを常に心掛けていました。これは、学生時代の牧野先生の「教えない指導」により、培ったものだと思います。「主體的に考え、答えを導き出し、自ら行動する」ことは、社会に出てから本当に必要なだと実感しています。大変ありがたいことに、先生方より助手として勤めてくれ

てよかったとのことのお言葉をいただき、転職もすぐに新たなご縁に出会うことができました。私は現在も主體的に考え、行動することを心掛け、少しずつではありますが、日々成長し続けられていると思います。先生のゼミ生でよかったと改めて感じております。本当にありがとうございます。四月以降、大学へ行っても先生にお会いすることができないのはとても寂しいですが、これからもお会いできるときに、先生から多々学ばせていただきたいと思っております。

大学四年間と卒業してからの三年間、大変お世話になりました。今後も日本や海外などあちこちに出掛けられ、研究を続けられるかと存じますが、どうぞお体に気をつけて、いつまでもお元気でいてください。

長きに渡る教員生活、本当にお疲れ様でした。またお会いできることをとても楽しみにしております。

(平成二十六年 卒業生)